

「2006年。500年ぶりにP2P時代がやってきた。」

【表現したい私の中のむずむず】

私は、かつてメディアの人間であった。

テレビでは、ひとつのコンテンツをつくるのに、100人が関わる。舞台では、50人というところか。プロモーションでは30人くらい。ラジオ番組では5人くらいが関わっていた。

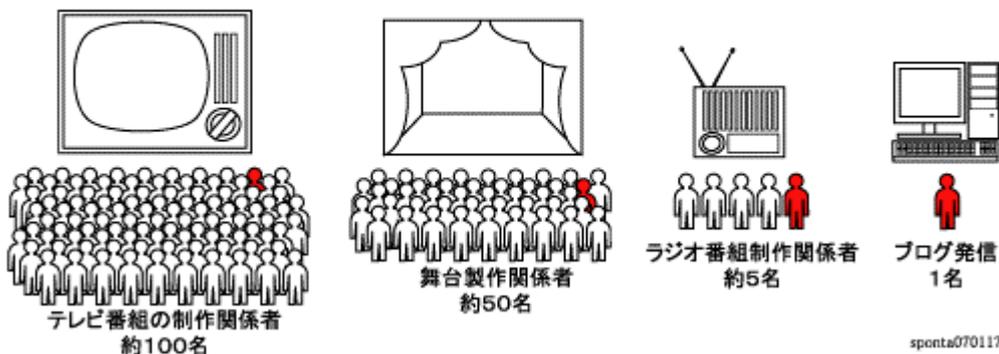
20代半ばの私は、使いっ走りや駆け出しでしかなかったが、コンテンツづくりで一番の手ごたえを感じたのはラジオ番組だった。

ブロードバンド元年といわれる2000年。私は、インプレスでブロードバンド番組のディレクターをした。半年ほどで私は役割を終えたのだが、当時も今と変わらず、インターネットの社会的な評価は、犯罪予告、援助交際、集団自殺を誘発するメディアであって、芳しいものではなかった。

とはいえ、あの頃も今もインターネットは、個が単独で世の中に表現できるツールである。

発信者集団の中の私

Fig.01



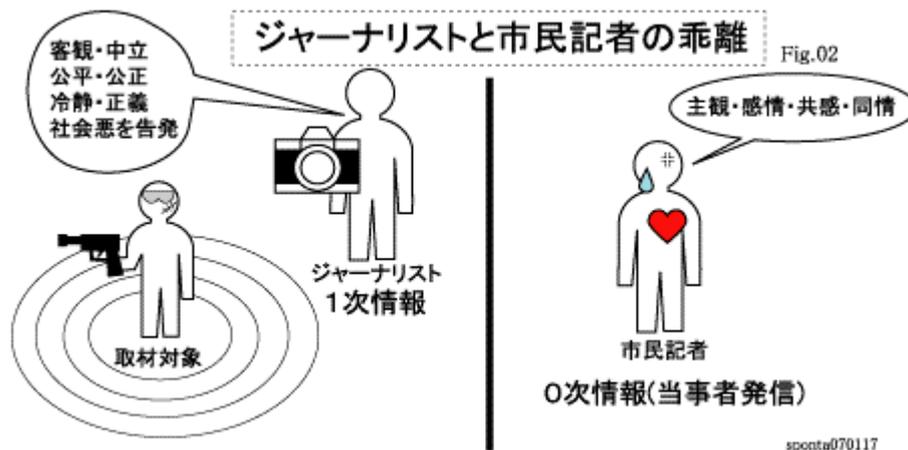
2004年、それまで個人サイトを続けていた私は、個人ブログを始める。そして、2005年、ホリエモンブームの中で、ライブドアがはじめた市民参加型ジャーナリズムに市民記者として参加することになった。

ライブドアのインターネット市民新聞の主宰者は、大学で新聞学を研究する人物。研修

会でジャーナリストが持つべき心得えを知ることになったが、私は何ひとつ納得できなかった。

「取材対象との一定の焦点距離を必要とするジャーナリズムは、他人の悲しみさえも自分の悲しみとする市民感情と相容れない。」

これは研修を終えた数日後の私を捉えた言葉だ。様々な軌轢を経て、半年を待たずして、私は書かざる市民記者になっていた。



2006年夏。編集長に鳥越俊太郎氏を迎えてオーマイニュース日本版がスタートした。インターネットにおける市民参加型ジャーナリズムの社会的認知度は、数年前に比べはるかに上回っている。だが、一向に盛り上がっていない。

その理由は、「ネット上の市民参加型ジャーナリズムは、既存マスコミ文化の延長線上にないこと」。既存マスコミ出身者たちが運営に携わっている限り、市民参加型ジャーナリズムの成功はありえない。

だが、日本における市民参加型ジャーナリズムの誕生を危ぶむ声はあっても、誕生を歓迎しない声はひとつとしてない。

だが、アルファ・ブロガー(有名ブロガー)を中心とするいままでインターネットに主導的な役割を果たしてきた人たちの中にも、市民参加型ジャーナリズムを成功させるタレントが存在しない。彼らは情報技術関連のビジネスマンであって、民主主義の理想を真剣に考えたことのない人たち。彼らが求めているのは、儲かるビジネスモデルであって、民主主義の理想ではなかった。

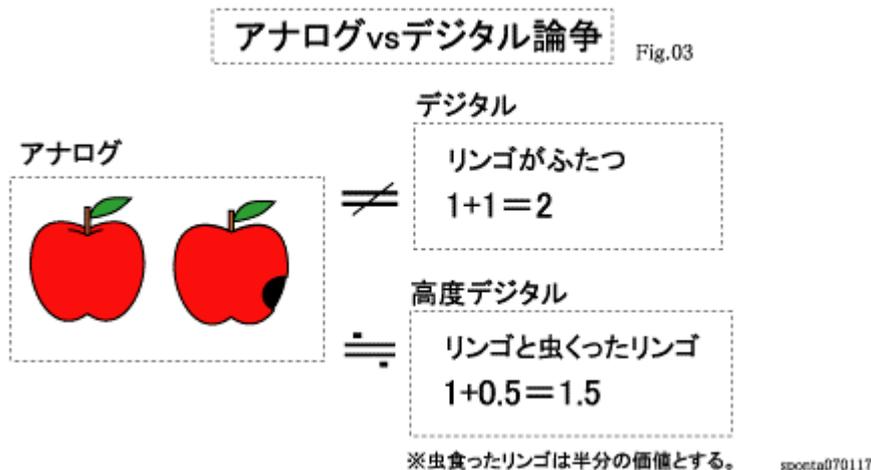
【アナログ vs デジタル論争の終焉。かつて言葉はデジタルだった】

「私はアナログ人間だから...」とって、パソコンを操らないことを言い訳できる時代はすでに終わった。パソコンが苦手と言って憚らない中年者たちも、リビドーの手伝いもあって携帯電話の使い方をマスターしている。

あのアナログ vs デジタル論争は何だったのか...

デジタルが事象を無限に切り刻んでいくなれば、出来上がるものはアナログと同じ。デジタル技術は、アナログな世界を切り捨てて数値的な世界にしてしまうのではなく、より精細なアナログな世界を構築していく。

言葉こそ、リアルな世界に存在する複雑で微妙なものを一刀両断に切り捨てて記号世界に引っ張り込むという、極めてデジタルなものなのだ。



世の中には、寸分たがわず同じリンゴなど存在しないのに、リンゴが一つ、リンゴがふたつと言って、誰も疑問に思わない。パソコンで扱われるものとそうでないものをデジタル・アナログとって分別することにはじめから意味などなかった...

いまでもインターネットをオルタナティブ・メディアと定義する人たちがいる。だが、既存のジャーナリズムに対して、ネット上の言論がオルタナティブ(相互補完的)かといえば、それは極めて疑わしい。

新聞人・歌川令三氏は、「新聞がなくなる日」(草思社 2005/09/06)と言い、経済学者・池田信夫氏は「ネットがテレビを飲み込む日」(洋泉社 2006/07/10)と言う。だが、それはセンセーショナルリズムでしかなく、現実を正確に捉えていない。

【グーテンベルグは情報革命を起こしたのか...】

インターネットの登場が、15世紀のグーテンベルグの活版印刷の発明以来の情報革命であるとの指摘がある。グーテンベルグの発明は、ルネサンス期における情報伝播の速度を飛躍的に向上させた。そのこと自体は間違いではないだろうが、だが、印刷された情報が果たして社会を横溢したのだろうか...

聖書に速報性が必要なのかという根本的な疑問や、中世ヨーロッパの識字率の低さやラテン語で書かれた聖書という要因もあり、印刷物が多量に出回っただけで、中世ヨーロッパの宗教観が一変したとは容易に考えられぬ。

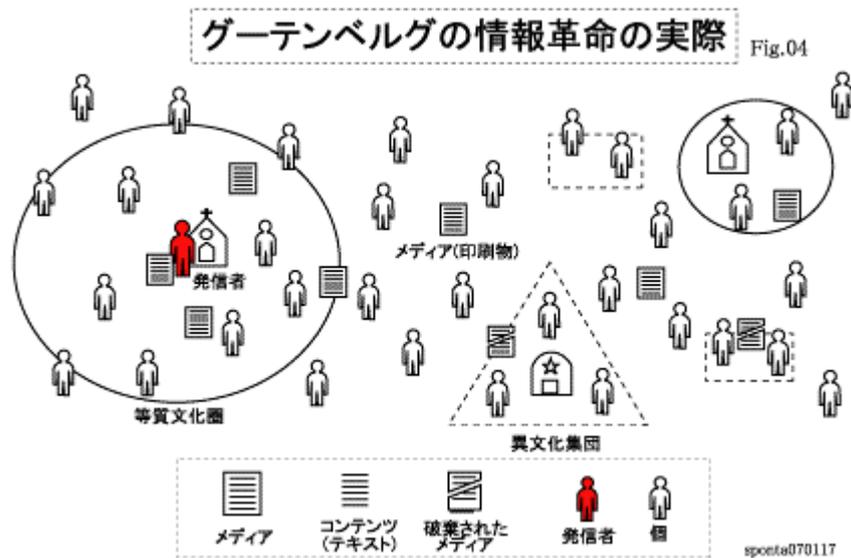
話題の書「ダヴィンチ・コード」は、モナリザが単なる絵画ではなく、隠されたテキストを載せたメディアだったことを題材にしている。著者の指摘どおり、異端派が主流派の迫害を逃れて現代に生き延びているなら、当時からさまざまな情報メディアが機能していたことが証明される。

「ダ・ヴィンチ・コード」に限らず、一神教に反する土着の神々の伝説が今に伝えられていることも、極めて示唆的である。

印刷メディアは、数ある情報伝達メディアのひとつでしかない。あたかもそれが全てであるなどと考えるのは浅薄。そして、それは識字率が向上し、聖書が現地語に翻訳された現代でこそ明らかになる。

ダーウィンの進化論によって人類が誕生したことは現代人の常識である。だが、「この世の中はアダムとイブから始まった」と、公立高校の授業で講じるアメリカ人教師がいる。

勿論、マスコミも公共機関もそんな教員を許さない。だが、そのような騒動が21世紀のアメリカでいまだに起きていることは、情報伝達にはさまざまなフェイズがあり、きわめて散文的なことを気づかせてくれる。



グーテンベルグによって情報伝達に革命が起きたというが、その影響は疑わしい。
最近の私は、グーテンベルグが起こした情報革命は、「情報伝達における革命」ではなく、
「ログを残す(時代を超えた情報伝達の実現)」という革命」だったと考えはじめています。

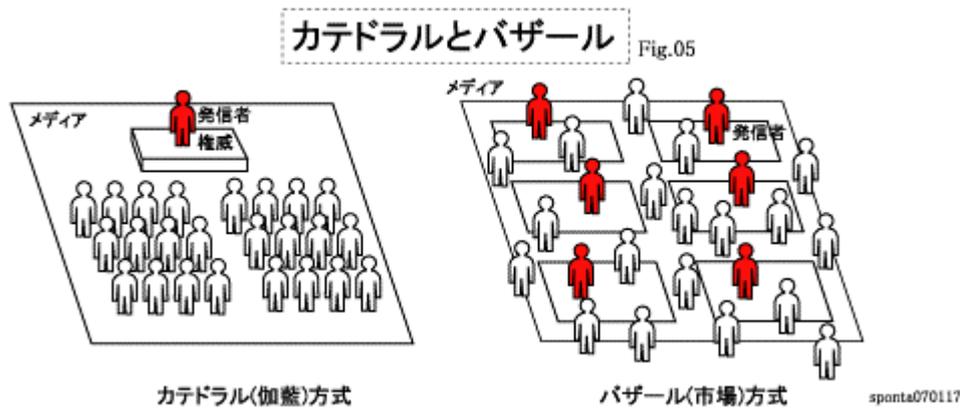
「インターネットの一番の特徴は対話型コミュニケーションではなく、ログ(記録・形跡)が残ること」。

インターネットにおける炎上やディスコミュニケーションを経験した人なら、私の言葉に納得するだろう。ネットを取り巻く様々な摩擦・軋轢も、煎じ詰めれば、ログを残すか残さぬかについて争われている。

もし、レオナルド・ダ・ヴィンチが、ログを残すためにモナリザを使っていたとするなら、ルネサンスの天才を悩ませた日常も、21世紀の我々が苦悶する日常も大して差が無いといえるのではないだろうか。

【カテドラルとバザール】

マスコミ型の情報配信の形をカテドラル(伽藍)型式。インターネットをバザール(市場)型式と定義されることがある。



カテドラルには、権威者たる情報発信者が存在し、集まった受信者たちに情報を伝達する。情報の流れは一方的であり、出版や放送をイメージできる。

一方のバザールは、カテドラルの門前の市場である。情報発信者は複数存在するが、彼らは必ずしも権威者ではない。受信者たちも私語を禁じられていないから、対話が成立する。情報発信者が複数存在し、受信者たちもけっして孤立していない極めてインターネット的な世界である。

だが、この概念は、インターネットをオルタナティブ・メディア(既存メディアの対称物)と捉える文脈上にある。

既存型のカテドラルな情報伝達形態を補完する意味で、より自由なバザールな情報伝達形態が存在するのだ。

だが、インターネットがオルタナティブ・メディアだったのは、ブログの普及前だ。ブログの登場により、カテドラルの中の発信者たちも対話を強いられるようになった。ブログ空間から沸き起こる対話の中から、アメリカの有名ニュースキャスターのダン・ラザーが降板するといった事象も起きた。

いままカテドラルの発信者が、カテドラルに集まった聴衆に一方的に情報を発信する状況は変わっていない。だが、バザールでの噂話がカテドラルの主たちの耳にも入る。その結果、カテドラルの発信者たちが言説を変えたり、発信する権利を失うことが起きている。

そして、カテドラルの発信者に限らず、エスタブリッシュな発信者のほとんどは、ネット上の対話を拒絶する。

2007年においても、そのような現実を捨象し、「インターネットを対話型メディアである」と喧伝して恥じぬ者がいるが、彼らはスポンサー企業の短期的な利益しか考えぬエバンジェリスト(業界語用論者)に過ぎぬ。

長期的企業戦略に立てば、メイカーフレンドリーな方針は必ず挫折し、ユーザーフレンドリーな方針が実を結ぶに決まっているのだから、彼らの言説は参考には及ばない。

【2ちゃんねる閉鎖騒動】

2007年1月15日、ネット上の巨大掲示板である「2ちゃんねる」が、運営者・西村博之氏の債権未払いに関連する閉鎖騒動に巻き込まれた。

これは、カテドラルの主(既得権者)たちが、バザールに集まった人たちに退去命令を出したと、形容することもできる。

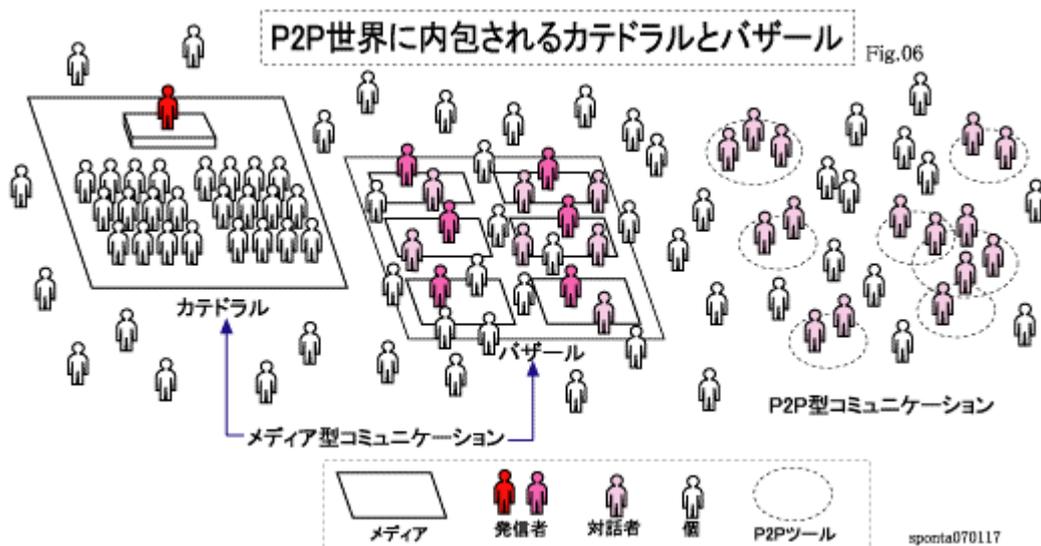
考えてみれば、カテドラルもバザールもメディア(媒体)の上で情報を交換してきた。だから、メディアの危機が訪れれば、その上にあるコンテンツも変質せざるを得ない。また、メディアが攻撃目標にされ、情報伝達が停止に追い込まれることも避けられない。

だが、カテドラルやバザールがなければ、人と人は情報を伝達できないのだろうか。メディアがなければ人と人はコミュニケーションできないのだろうか…。

そんなことはない。

いつの時代も、人と人はコミュニケーションしてきたし、それはメディアがあろうとなかろうと関係がない。

それが、P2P(メディアを介さない情報伝達方式)の時代である。



メディアの構築には対価がかかるため、その対価を支払った個が権力を持つ。権力を持った個はそのまま発信者となり、言論を欲しいままにする。それが、ゲーテンベルグの発明以来世界中で繰り返されてきた伝統だ。

だが、インターネットの登場により、メディアの構築費用は限りなくゼロに近づいた。

結果、いままで対価を支払うことで強権を得ていた発信者の合理性が希薄になる。これまでメディアを持つ余裕のなかった人たちが発信権を持つことにより、いままでメディアを牛耳ってきた強権者たちの歪んだ言論が糾弾されることが日常になった。

2006年。ブログが普及し巨大掲示板が一般的になった。

そのトピックスは、有名人ブログの炎上や、既存マスコミが、批判という文脈ながらも、インターネット言論を引用しはじめたことだ。

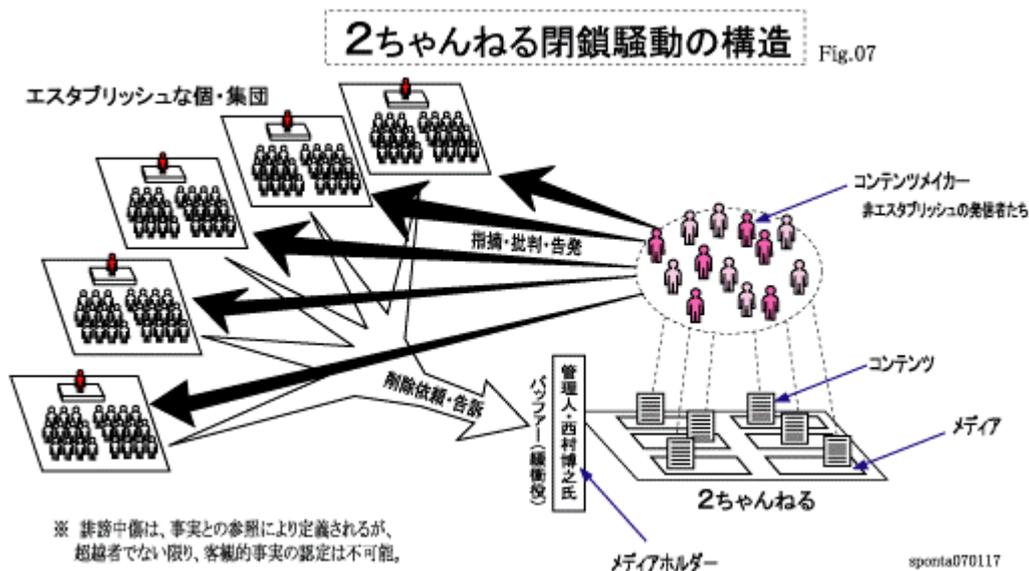
インターネット言論の社会的注目度は限りなく盛り上がり、堪りかねた強権者たちは、一致団結して、言論封鎖をしかける。

そして、2007年。正月早々に2ちゃんねるの閉鎖騒動が起きるのである。

悪名高い2ちゃんねる。それが世の中から失われて喜びの声を上げる人たちも多い。だが、この稀有なスケールを持つメディアが、多様な言論を許容してきた役割は大きいし、その価値は高い。

この言論のサンクチュアリ(聖域)が、管理人である西村博之氏が訴訟の一切を発言者に代わって引き受けることで成立していたことは重要である。

私は、「2ちゃんねるは、管理人の西村氏が訴訟のバッファ(緩衝材・調整槽)となることで、かろうじて成立している」と指摘してきたが、今回の閉鎖騒動がどう展開していくにしても、管理人・西村氏がゲートやフィルターではなくバッファでしかなかったことが理解できる。



【メディア型コミュニケーションの時代から、P2P コミュニケーションの時代へ】

私は、2006年初夏から、インターネットのこれからは「P2P(メディアを介さない情報交換)の時代」として説明している。P2PというWinnyに象徴される違法システムと捉える向きもあるだろうが、基本的には、ネットワークの情報伝達のネックが一極に集中するという性質を持っているクライアント・サーバー・システムに究極の負荷分散をもたらすシステムである。

Winnyでは著作権の侵害が問題になったが、私の論では著作権は捨象している。情報の個人取引・物々交換といった意味合いだ。

2ちゃんねるの反社会性はさておき、「自由な言論空間」が無くなることは憂慮すべきことだ。

さらにいえば、言論を封じるにあたり、コンテンツ(情報そのもの)やコンテンツサプライヤー(情報発信者)をターゲットにするのではなく、メディア(媒体)をターゲットにするのは、極めて論理性を欠く。

30余名の死者を出したオウム真理教の布教メディアとして機能した京都大学のキャンパスが、「自由な言論の場」という理想のもとに、事件発覚後も一切の規制が加えられていないことと対照すれば、今回の2ちゃんねるの閉鎖騒動が異様であることが理解できる。

勿論、無数に存在する発信者たちのもぐらたたきに勝機を見出せない強権者たちが、メディアを攻撃目標にすることで勝利を目論むのは当然のことではあるが...

では、何故、2ちゃんねるが閉鎖騒動に巻き込まれたかといえば、それは、2ちゃんねるがメディア型コミュニケーションだったからだ。

メディアという実体がある以上、介入は可能だ。情報介入を許した場合、情報内容と情報価値に特定のバイアスが生じてしまうことは避けられない。メディアを分散し、情報のバックアップがとられたところで、構造的欠陥は解消しない。

だが、P2P型コミュニケーションならば、一切の介入を許さないシステムが構築できる。韓流ドラマの大ヒット作「冬のソナタ」のヒロインは、「私の記憶は私のもの」と名セリフを吐いたが、いかなる権力によっても、個のローカルな情報に介入できぬことは間違いない。

いかにストレージメディアを分散しても、ログの廃棄を強制する強権力からは逃れられない。だが、個人のローカルなログ(情報の記録)は、いかなる強権といえども介入できぬ。

ならば、個人の言論を基本単位として、それらのリンケージ(連携)やインテグレート(統合)を図ることによって、自由な言論空間をつくれればいい。

インテグレートとは世論形成システム。個の言論たちを統合し、社会の意見として形成していくことである。

グーグル検索はメディアを感じないP2P的なシステム(キャッシュというストレージがあることはさておき...)だが、その検索を左右するのはアクセス数である。

そこで、ネット企業はSEO対策を練りアクセス数を水増しする。行き過ぎた不正を行う広告主に対しては、グーグル八分が行われる。人気投票は客観的評価のひとつだが、組織票の影響を免れない。私は、「人気投票とは、議論を尽くせぬままに採決を行ったもの」と断じる。

【インテグレートとオーソライズ】

今回の2ちゃんねるの閉鎖騒動を時代の転換点と捉えるならば、ここから読み取るべきことは、「メディアを介したコミュニケーションでは、表現の自由はけっして実現しない」こと。

だが、RSSリーダーのような「メディアを持たぬP2Pのコミュニケーションでは、世論は形成されぬ」。

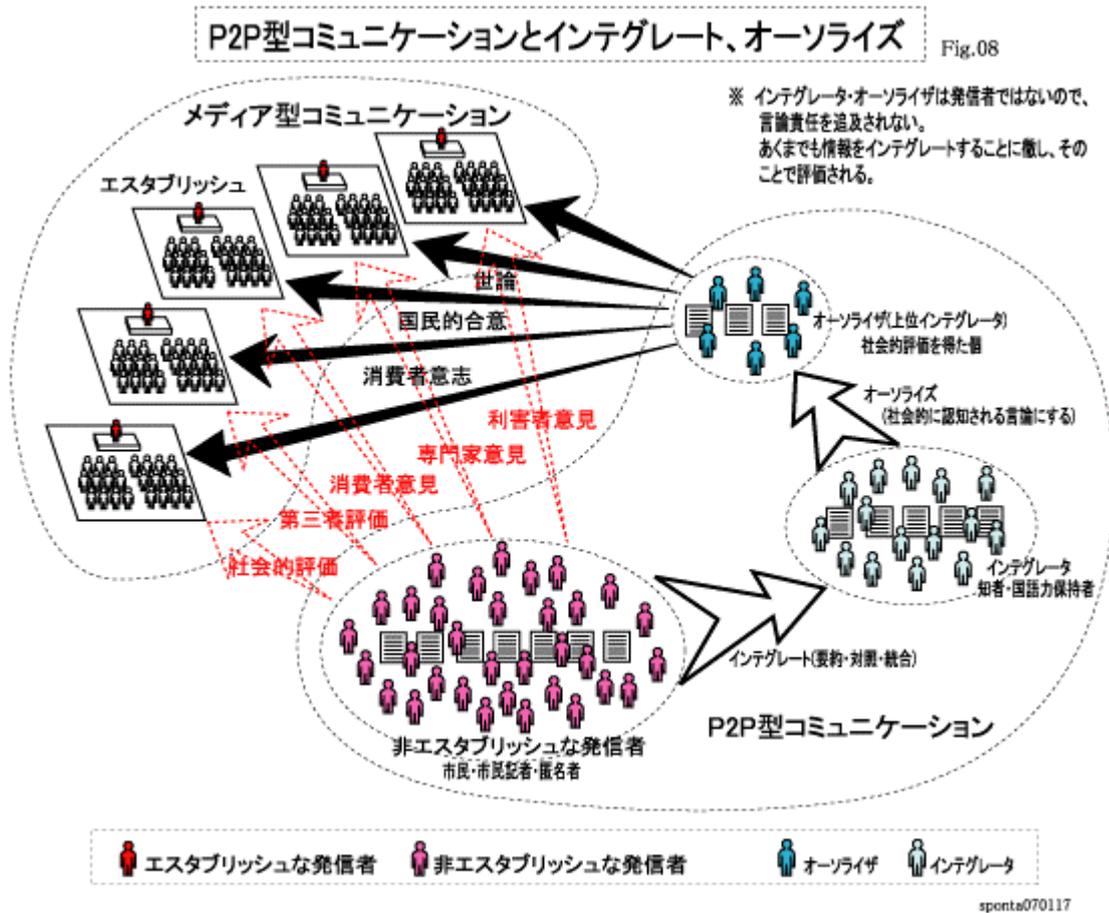
これでは、情報の海の片隅の存在に過ぎぬメディアが復権し、メディアを牛耳る強権者(既得権者)たちのバイアス(偏向)のかかった言論の時代はいつまでも続くことになってしまう。

そうしたP2Pコミュニケーションの不備を埋めるのが、インテグレータ(統合者)・オーソライザー(署名者・権威づけ者)である。

インタグレータという個がネット上に存在し、個が提出する情報を精査し、要約・対照・統合していく。そのようなインテグレータの多層な作業によって、メディアを介さずに世論が形成されていく。

情報は個やメディアを離れ、もはや、情報そのものによってしか存在しない。

インテグレータ上位の個は社会的な認知度・信用度が高く、扱う情報は世論として認知され、オーソライズ(権威化)される。



いま、四大新聞の一面を飾る記事は、新聞社という権威によってオーソライズされた情報であり、政府・企業・関係者たちは無視することはできず、即刻対応するか説明が求められる。現在のマスコミは、そのようにして世論提示システムとして機能し、社会に影響力を行使している。

P2P の時代にあっても、同様なことがインテグレートとオーソライズを通じて行われなければならない。

では、そのようなインテグレートとオーソライズを行うものが誰なのかといえ、そのような高度な知力を市井人に望めることはできない。市民記者は情報提供者にはなれるかも知れぬが、高度な洞察力・分析力、そして、国語力を兼ね備えたジャーナリストにはなれぬのである。ならば、インテグレートとオーソライズの役割を果たすものこそ、これからの時代が求められるジャーナリスト像といえる。

したがって、もし歌川氏が言うような「新聞がなくなる日」がきたとしても、新聞人たちがやらなければならぬことはなくなるのである。

(以上、6957 字)